

祝

立川市立第九小学校は 創立150周年を迎えました



150周年の人文字

明治5(1872)年、砂川村によって流泉寺の境内に西砂川小学校が開校されました。昭和38(1963)年、立川市と砂川町との合併により砂川第二小学校と改称され、昭和40(1965)年、現在の第九小学校となりました。

令和4年11月26日(土)、創立150周年の記念式典を開催し、6年生が「よろこびの言葉」と人文字を披露しました。式典後のお祝い集会では、各学級が作製したモザイクアートの紹介や和太鼓クラブの演奏、子どもたちが毎年手作りする「コッコみそ」の販売もありました。最後は打ち上げ花火が初冬の夜空を飾り、喜びと感動にあふれる一日を締めくくりました。



モザイクアート



和太鼓クラブの演奏



150周年を祝う校舎屋上の看板

問学務課学務係・内線2517

立川市の
歴史と
文化財

50

資料館で一番「長い」資料とは？

本コーナーも、ついに50回目を迎えました。今回は長く続いているこのコーナーにちなんで、当館所蔵の民俗資料(用具)としては一番「長い」蛇籠をご紹介します。

蛇籠とは、河川の護岸工事に土砂止めや水流制御のために古くから使用されてきた籠のことです。亀甲形に粗く編んだ円筒形の籠のなかに割栗石や河原石を詰めて堤防の法面に並べたり、積み上げて使用します。蛇籠という名称は、その形が大蛇の伏した姿に似ているからといえます。蛇籠の素材には古くから竹が使われてきましたが、柳や粗朶(細い木の枝)、藤蔓、葡萄蔓なども使われました。

近年、記録的な異常気象が相次ぎ、川の氾濫など各地で被害が報告されています。



写真1 市指定有形文化財「柴崎村絵図」(部分)にみえる水制用具(○枠の箇所) ★印は現在歴史民俗資料館がある場所で、上が北、下が南の方角です。



写真2 当館所蔵の蛇籠

す。立川付近でも、令和元(2019)年の台風19号による豪雨災害で、多摩川に架かる日野橋の橋脚が一基沈下し、通行止めとなったことは記憶に新しいところです。昔から、多摩川はその流域に暮らす人々に多くの恩恵をもたらす一方で、重大な水害をも引き起こしてきました。江戸時代の観光ガイドブックともいうべき『江戸名所図会』の多摩川の項にも「雨後杯には渡口移転して定まる事なし」とあるほど、暴れ川としても知られていました。

昨秋、当館では企画展「多摩川と立川―利水と災害―」を開催しました。同展に出品した享和4(1804)年の「柴崎村絵図」にも、多摩川の河畔に牛杵(杭状の部材を三角錐や方錐状に組んだもの



写真3 蛇籠の製作(昭和46〔1971〕年)

に石を詰めた水制用具)や蛇籠と思われる道具を示すような図が描き入れられています(写真1)。昔から、流域に暮らす人々が川の水流の強弱を読み、護岸のための工夫を凝らしていたことが絵図からも見て取れます。

当館所蔵の蛇籠は、竹製で長さ約3m、80cm、円筒の直径約35cmのもので、なかに詰められていた石は保存されています(写真2)。この蛇籠については川のどのあたりに、いつまで設置されていたものかなど、具体的な記録が遺されておらず判然としませんが、蛇籠自体は、製作風景(写真3)や堰の写真から、昭和46(1971)年にはまだ実用されていたことがわかります。

歴史民俗資料館では、2月19日(日)まで、本稿で紹介した蛇籠など、多摩川河畔に暮らす人々の生業道具や、人々の生活の道具を展示した企画展「暮らす―むかしの道具たち―」を開催しています。実物の蛇籠の大きさを前に、資料館まできてみませんか？

問歴史民俗資料館(生涯学習推進センター文化財係) ☎(525)0860